

能「松山鏡」評（三輪 建二）

充実した2時間の公演を堪能いたしました。

「鏡」がモチーフの公演で、作品を鑑賞した後は、深く考えさせられました。

狂言「鏡男」は、鏡に映っているのは自分の姿見であることを知らないことから来る「おかしみ」を土台にしています。おかしみがストレートに伝わってきたのも、言葉がはっきり聞き取れ、また演技力があるからと感じました。

なお公演後、帰宅してからも何度か思い出しては考えていたのが能「松山鏡」でした。姫が鏡の特性を知らなかったという点では鏡男と同じですが。それは「おかしみ」や滑稽さではなく、亡き母を憶う「悲しみ」の気持ちとして表出されていました。

他方で最後は、亡き母が登場し、菩薩の座像の姿で鏡に映っているとのこと、これは姫の母を憶う「孝行心」の気持ちを反映しています。

同じ鏡による反映であっても、姫の気持ちの二重性（母を失った悲しみと、母への孝行心）が出ているので、奥深いなと感じ入りました。

鏡による心の反映という点では「松山鏡」は、シェークスピア作品のような「心理劇」として観ることのできる作品なのかもしれません。

1つは、「母と娘」とのあいだの心理劇です。

姫の気持ちの二重性ということだけではなく、母への依存から、母からの自立へという姫の心理的成長の物語にもなっています。

また、亡き母の登場は、母が娘に、鏡の意味を伝えたかったからだという雲龍櫻子様のパンフレット説明も、母側の娘への心理を見事に示しているものだと感じ入りました。

もう1つは、「父と娘」とのあいだの心理劇です。

父が鏡の意味を娘に説明するのは、間違いを指摘するという点では、亡き母の役割とはまったく異なっています。いわば、「切る」「切断」といういかにも男性的な発想ですが、それは娘にとって必ずしもマイナスの影響を与えていません。

根岸しんらさんが書いているように、父の役割は、娘が精神的に自立した人間になることに深く貢献しているように思いました。（根岸さんの解釈は、もう高校生、いや大学生レベルですね）

心理劇という点でも、鏡は、その人の「真実の姿」を映し出しており、またその成長をも映しているということが言えるのかもしれませんが。

でも最後にふと思ったのは、以上のようにあれこれと考えていること自体、あるいは能のメッセージとは異なっているのではないかという点です。

あれこれ考え、分析することは、西洋的な合理主義と個人のアイデンティティ論に左右されているのかもしれませんが。あれもこれも一緒になって混在しているというメッセージのほうが正しいのかなと思った次第です。

本当にありがとうございました。 （三輪建二）